

## ヘラクレイオス帝による帝位号の変更

杉 村 貞 臣

## 一 七世紀ローマ帝国の文化史的傾向

ローマ帝国は七世紀に大きな転換期を迎えた。帝国はその発足当時より地中海世界を支配していたが、五・六世紀にイタリヤ、ガリア、イスパニア、ブリタニアを失ったのに続いて、七世紀に入るとアラブ軍の侵略によりアルメニアからシリア、パレスティナ、エジプトを経てアフリカに至る地域を奪われた。これを地中海世界における文化圏別に見るとラテン文化圏はゲルマン民族の支配下に入ったのに対し、オリエント文化圏はアラブ人の支配下に入り、ギリシア文化圏（バルカン、小アジア、南イタリヤ、シチリア）のみがローマ帝国の領域に留った。また宗教的観点に立てば、オリエント文化圏はイスラム教世界に属したのに対し、ギリシア文化圏とラテン文化圏とはキリスト教世界に属しており、いわば地中海世界は二つの宗教世界に分裂したのであった。このように領域を縮小されたローマ帝国は、地域上ギリシア人をその基本的な構成民族としたが、七世紀には新たにスラヴ人、アヴァール人、ブルガール人を迎え、民族構成を複雑化した。帝国はこの外部からの民族的圧迫に対処するため、ロゴセテース機構やテマ制度を創設して行政機構を再編成し、キリスト単意論を提示して国民の精神的結束を試みた。また農村においても自営農民

が抬頭し、それが国家的に保護されていた。このようにローマ帝国は七世紀において、帝国領域、民族構成、行政機構、宗教信条、農民社会の諸分野において大きく変貌した。<sup>(1)</sup>

このような変貌のなかで帝国民の意識もかなり変ったと考えられるが、ヴァシリエフ、ランシマンあるいは『ケンブリッジ中世史』の叙述によると精神文化の面でいちじるしい変化があった。なかでも(1)ギリシアの要素が文化の諸相で表面に現われたこと、(2)キリスト教的神秘主義あるいは抽象主義が濃厚になってきたこと、がすぐれて指摘された。<sup>(2)</sup>この二点に留意して七世紀における帝国の文化を概観すると、まず音楽では「ビュザンティオン聖歌 Byzantion hymn」がコンタキオン形式から純粹にギリシア的なカノン形式に変わっている。<sup>(3)</sup>美術ではキッツィンガーがこの時代の様式的特徴を把握するにあたり、同時代に製作された絵画と浮彫を検討した結果ヘレニズムの潮流と抽象主義的潮流の二面があることを指摘している。<sup>(4)</sup>また文学においてもデルガーによれば、この時代に一方ではマククシモスを代表とするキリスト教文学と他方ではゲオルギオスに代表されるギリシア人の感情を表した文学とがあった。<sup>(5)</sup>このギリシア的要素とキリスト教的要素が並存あるいは融合した文化形態は、中世ヨーロッパにおいてもコンスタンティノポリスとテサロニケを中心としてバルカンと小アジア地方に限って見られるところである。しかも七世紀の帝国を論ずるにあたり、とくに強調しなければならないのは前述の帝国領域縮小過程からみてギリシア的要素の表面化である。

七世紀のローマ帝国はヘラクレイオス王朝(六一〇—七一一年)の諸皇帝の統治下にあった。この時代の文化史的潮流、なかでもギリシア的要素の表面化という傾向は、ヘラクレイオス王朝時代の諸皇帝の活動とどのようなかかわりをもっていたのであろうか。この問題、すなわち一国の文化的傾向とその統治者の姿勢を関連づけて考えることは、その時代の国家の文化的性格ないしは歴史的位置を理解するにあたり、きわめて重要な意味をもつ。そこで本論では、ヘラクレイオス王朝時代の文化的位置を理解するにあたり、まず王朝創始者であるヘラクレイオス帝(位六

一〇一六四一年)をとりあげたい。ヘラクレイオス帝の文化史的足跡としては、帝位号の変更とヘルシア遠征の二つが考えられる。ただ後者については他稿で若干考察するところがあったので、本論ではヘラクレイオス帝の帝位号変更について、いさなか立ち入って考察を試みたい。

註(1) 拙稿「ヘラクレイオス王朝におけるビュザンティオン世界の成立」『史学雑誌』第七九篇第十二号(一九七〇年十二月)一三八頁。

- (2) Vasiliev, A., *History of the Byzantine Empire 324-1453* (Madison, 1952), 179-192. Runciman, S., *Byzantine Civilization* (London, 1933) 40-41. *Cambridge Medieval History* (=CMH) W-2 (Cambridge, 1968).
- (3) Wellz, F., *Byzantine Music and Hymnography* (Oxford, 1961) 428-441.
- (4) Kitzinger, E., *Byzantine Art in the Period between Justinian and Iconoclasm* (in *Berichte zum XI Internationalen Byzantinisten-Kongress*, München, 1958, Beiage, 1-50) 辻佐保子訳『ビザンティン美術の「潮流」』創文社 一九七一年。
- (5) Dölger, F., *Byzantine Literature*, CMH W-2, 206-264.
- (6) 拙稿「ヘラクレイオス帝のペルシマ遠征」『オリエン』第十二卷第三・四合併号(一九七一年)八七一-二〇頁。

## 二 帝位号の変更

アウグストゥス帝以来ローマ帝国皇帝の称号として Imperator Caesar Augustus という三語が使用された。<sup>6)</sup>なお Imperator に代って *Ἀυτοκράτωρ* Augustus に代って *Σεβαστός* が使用されることもあった。<sup>7)</sup>またコンスタンティヌス一世時代になると Flavius の名辞が入った<sup>8)</sup>が、これは、ヴェスパシヤヌス帝 Vespasianus (位六九一七九年)とその二人の息子ティトゥス帝 Titus (位七九一八一年)、ドミティアヌス帝 Domitianus (位八一—九六年)の家系名にちなんだものであった。

ローマ帝国の勅令は六世紀初頭までラテン語で書かれていたが、ユスティニアヌス一世(位五二七—五六五年)は、その「新勅令」においてギリシア語を用いた。<sup>60</sup>しかし前述の Emperor (*Ἄριστοκράτωρ*), Caesar Flavius Augustos の四語はそのまま使用されていた。<sup>61</sup>この形式は七世紀初頭にも現われている。たとえばヘラクレイオス帝が六一〇年に出した勅令では、

*αὐτοκρατόρας καίσαρας Φλάβιος Ἡράκλειος νέος Κωνσταντῖνος πιστοὶ ἐν Χριστῷ ἀγνοῦσθε.*

と記されている。<sup>62</sup>六一〇年といえればヘラクレイオス帝が即位した年でもあり、帝はその帝位号についても前任者の様式をそのまま踏襲したと考えられる。なお末尾の *πιστοὶ ἐν Χριστῷ* (キリストの信者) は、ローマ帝国がキリスト教を国教としていたところから、国教保護者の立場を明らかにするために附せられたものであろう。また六一二年の勅令では、

*Ἀριστοκράτωρ Καίσαρ Φλάβιος Ἡράκλειος, πιστὸς Ἰησοῦ ἡμερώτατος μέγιστος, εὐρητής, ἐκρημικός, ἀλαμαντικός, γοθικός, φραγγικός, γερμανικός, ἀντικός, οὐανθαλικός, ἀφρικανός, ἐσουλικός, γρηδικός, εὐαβής, ἐντυχής, ἐνδοξός, νικητής, τροπαιόχως, ἀειέβατος ἀγνοῦσθε.*

と記される。<sup>63</sup>この四語を含む様式は六一〇年まで続けられた。<sup>64</sup>

ところが同じヘラクレイオス帝でありながら六二九年の勅令では、その帝位号を

*Ἡράκλειος καὶ Ἡράκλειος νέος Κωνσταντῖνος, πιστοὶ ἐν Χριστῷ βασιλεῖς*

と書いている。<sup>65</sup>すなわちこの年になって、それまで使用して来た *Ἀριστοκράτωρ* (Emperor) *Καίσαρ Φλάβιος Ἀγνοῦσθε* の四語の使用を取り止め、その代りに *Βασιλεῖς* を *Ἀγνοῦσθε* の位置に入れ込んでいる。ここに帝位号の変更がみられる。*Βασιλεῖς* は、古代ギリシアでは「王 king」の意味で使用され、ラテン語の *rex* に相当していた。この用法はソフォクレスによれば、ディオゲネス Diogenes が二二〇年に使用しており、ユスティニアヌス一世の「新勅令」

でもこの意味で使用されている。<sup>60</sup>ところがオストロゴルスキーによれば、*Basileus* とは、ローマ帝国においてはユスティニアヌス一世時代まで、他国の統治者について使用された語であった。しかもそれはアルメニア、エチオピアなどの王について使用せられ、時にはゲルマン系民族の王にも適用された。ところがヘラクレイオス帝が、*Basileus* を勅令に使用して以来、その意味は変り、*Basileus* はいまやかつての *Βασιλευς Καλαυ Αθιωτατος* にとつて代り、その機能を果すことになった。<sup>61</sup>しかし *Basileus* は、七世紀の世界ではローマ帝国とペルシア帝国の二大国の統治者に限って使用された、いわば格式の高い名辞となった。<sup>62</sup>これに対し他の国の統治者については、たとえばヨーロッパ諸国の王に対しては *rex* を、<sup>63</sup>アジア系民族の国王に対しては *χαιρανος* を<sup>64</sup>それぞれの王位号として使用していた。

六二九年といえ、ヘラクレイオス帝にとっては、ロゴセテース機構やテマ制度の設置（後述）に着手したあと、ペルシア遠征（六二二—二九年）を終えた年にあたり、帝の主要な政策をなしとげた年であった。その意味でヘラクレイオス帝にとって六二九年とは、ペルシア遠征に出るまでの六一〇年代に較べておおよそ政治情勢を異にしていたといえる。ではこのペルシア遠征を挟んで、その前後で帝位号が変っているのは何故だろうか。またその変更は同時代の帝国にとってどのような意味をもつのであろうか。しかも帝位号の変更はヘラクレイオス帝という一人の皇帝の治世中におこなわれたものであり、そこには等閑に付すことのできない問題が秘められているのではないだろうか。このような観点に立って、以下ヘラクレイオス帝による帝位号変更の背景と意味について考察したい。

註(1) 弓削達『ローマ帝国の国家と社会』岩波書店、一九六四年、一〇二頁。なおこれら三語の意味については同書九八一—一〇〇頁に詳しい。

(2) 同書一〇〇頁。

(3) 同書一〇二頁。



第一は、ヘラクレイオス帝時代のローマ帝国領域において使用されていた言語の分布状況が考えられる。筆者はこれまでユスティニアヌス一世時代にみられたローマ帝国における最後の地中海世界支配体制を起点として、ヘラクレイオス王朝時代に至るまでの変化を概観してきた。<sup>(4)</sup> その意味でまずユスティニアヌス一世時代のローマ帝国領域にみられた言語の地理的分布をみると、西からみてイスパニア、イタリア、ダルマティアの各地ではラテン語が、イタリア南端、シチリア、ギリシア本土、エーゲ海諸島、トラキア、小アジア中・西部ではギリシア語が、小アジア東部ではアルメニア語が、シリア、パレスチナ地方ではカナン語が、エジプトではコプト語が、アフリカではベルベル語がそれぞれ原則的に使用されていた。<sup>(5)</sup> もちろんこれらの地域のなかでも、さらに細区分すればより多くの言語が使用されていたであろう。またひとつの言語の使用区域の境界も、行政区画を図示する程には、鮮明に記述することは難しい。ところで後期ローマ帝国時代にはラテン語が公用語となっていたけれども、イタリア、ダルマティアを除く地域では、農民や商人たちはそれぞれその土地固有の言語で生活していた。この時代の帝国中・東部でラテン語を使用していたのは、高級官僚か僧侶に限られていた。このように考えると、ラテン語の使用区域は広範囲におよんでいたように見えるがその使用者層はかならずしも厚くはなかったといえる。しかもヘラクレイオス帝時代になると、イタリアの主要部はランゴバルト族の支配下に入り、<sup>(6)</sup> またわずかに残っていたイスパニア南部もヴィジゴット族に奪われた<sup>(7)</sup> のでラテン語使用区域の大半がローマ帝国領域から離脱してしまった。そのためヘラクレイオス帝は、もはやラテン語を公用語にしておく必要がなくなったのである。<sup>(8)</sup>

第二は、コンスタンティノポリスの日常用語がギリシア語であったということである。コンスタンティノポリスは、前六六〇年頃メガラ出身のギリシア人が建てた都市であり、その人口の大半もギリシア人であった。そのため市民の日常用語も当然ギリシア語であった。ところがコンスタンティヌス一世による遷都以来、ラテン語系の文化が意識的にこの都市へ移入されたのであるが、それにもかかわらずそこで実際にラテン語を使用したのは、皇帝側近の高

級官僚あるいは上級の聖職者など、いわゆる若干の支配者階級に過ぎなかった。<sup>6)</sup> このラテン系文化の普及はユスティニアヌス一世時代まで続き、とくに帝は「古代ローマ帝国復活」を統治方針の基本にあげていた。<sup>7)</sup> しかしユスティニアヌス一世自身みずからの勅令を、帝都でもっとも理解し易いためにという意味でギリシア語で公布しており、さらに帝の没後はイタリア地方の帝国領域離脱と相俟って、コンスタンティノポリスではラテン語使用の必要性が次第に薄れていった。しかもマウリキウス帝（位五八二—六〇二年）と教皇グレゴリウス一世（任五九〇—六〇四年）の対立<sup>8)</sup>により、コンスタンティノポリスでは反ラテン的意識が強まり、このことがかえって帝都の住民にギリシア語使用意識を刺戟したとも考えられる。いずれにしてもヘラクレイオス帝は、即位後この傾向を見定めてラテン語の使用を止め、帝都の日常語であるギリシア語の公用に踏み切ったのではないかと考えられる。

第三は、ヘラクレイオス帝自身の即位後における体験である。ヘラクレイオス帝は、即位後六二九年に至るまでの間、そのほとんどを軍隊の陣営で暮した。とくにベルシア遠征を挙行していた六二二年よりおよそ八年間というものは、皇帝というよりもむしろ軍司令官として生活した。<sup>9)</sup> ところで帝の率いた軍隊といえば、それを構成する大部分はギリシア人であった。またヘラクレイオス帝がベルシア遠征中に通過した都市や農村の住民もギリシア人であった。そしてこれら軍隊の将校や兵士たちあるいは通過した地域の住民たちは、ヘラクレイオスを「バシレウス」と呼んだ。したがってヘラクレイオス帝自身みずからを「バシレウス」と呼ばれるのに慣れてしまった。<sup>10)</sup> このような雰囲気の中で暮していると、ヘラクレイオスはいまさら「アウトクラトル、カエサル、アウグストゥス」というラテン系概念をもった言葉で呼ばれるのが、いまさら時代遅れのものと感じたと考えられる。

第四は、ローマ帝国における行政機構の名称にもギリシア語が使用されてきたことである。たとえばそれまで「軍団」を意味する用語としてラテン語の *legio* が使用されていたのがギリシア語の *στρατηγία* に代り、しかも *στρατηγία* はそれまで帝国の地方行政区画の用語として使用されていた「道 *praephectus*、*dioeces*、州 *province*」に代って新たに帝国



地方行政区画の名称になった。<sup>63)</sup>また中央行政機構についても、ヘラクレイオス帝が即位した当時はその機能が完全に麻痺してしまっていたので<sup>64)</sup>、帝は機構の再編成に着手したが、その際ははじめに手がけた財政機構については *λογοβεργς* というギリシア語の名称を与えた。<sup>65)</sup>その他ストラトスによれば「城塞」を意味するラテン語の *castrum* は、ギリシア語風に *kastrom* と呼ばれるように変った。<sup>66)</sup>このようにヘラクレイオス帝即位後帝国の官職名には、目立ってギリシア語が使用されるような傾向を提示し始めた。

以上提示した四項目のうち、最初の二項目、すなわちラテン語使用地域のローマ帝国領よりの離脱と、コンスタンティノポリスにおけるラテン語使用必要性の弱化とは、ヘラクレイオス帝が即位する直前の現象であった。この二つの傾向は、コンスタンティノポリスにおけるギリシア語使用意識を高めさせるものであったが、果してヘラクレイオス帝が即位した後にも、帝をとりまく情勢は、その軍隊生活においても新設の行政機構の名称においても、ともにギリシア語的な雰囲気主流をなしていた。このようなローマ帝国における脱ラテン的傾向は、その埋め合わせとしてギリシア的意識を高揚させたが、このような転換期のなかにあつて帝位号も、ラテン的名辞を廃してギリシア的名辞に切り変つたと考えられる。

註(1) 拙稿「ヘラクレイオス王朝におけるビュザンティオン世界の成立」、同「ユスティニアヌスの後継者時代考」『姫路学院女子短期大学紀要』一号、一九七四年、一七—二九頁。

(2) 『キリスト教大事典』(教文館、一九六三年)附録第十五図においては、とくに七世紀の世界で比較的国際性のあつたギリシア語とラテン語の使用区域が明示されている。

(3) 拙稿「ユスティニアヌスの後継者時代考」一九頁。

(4) Stratos, A.N., *Byzantium in the Seventh Century*. I (Amsterdam, 1968), 122.

(5) この点についてストラトスは、ラテン語およびラテン語使用地域の喪失によって、ギリシア語およびギリシア語使用族は

ヘラクレイオス帝による帝位号の変更

「静かな大ローマ国家 the still great Roman State」のなかで、もはや小教党ではなくなり、なかなしくギリシア精神おとびギリシア文明が表面化したことを指摘している。Stratos, A. N., *op. cit.*, I, 342.

- (6) ストラトスによれば、ラテン語は、コンスタンティノポリスでは教育を受けた階層の間でもあまり知られていなかった。とくにコンスタンティノポリスではたしかに多くの言葉はラテン語に由来しているが、都の住民たちはそれをギリシア化して使用していた。Stratos, A. N., *op. cit.*, I, 344.

- (7) Vasiliev, A. A., *History of the Byzantine Empire*, 324-1453, (Madison, 1952), 133.

- (8) 拙稿「エステュニアヌスの後継者時代」一五頁。

- (9) 拙稿「ヘラクレイオス帝のヘルシア遠征」『オリメント』第十二巻第三・四合併号（一九七一年）、八九—九三頁。

- (10) Stratos, A. N., *op. cit.*, I, 344.

- (11) 拙稿「テマ制度形成時期考」『関西学院史学』Ⅷ（一九六四年）、六九—八六頁。

- (12) *Theophanis Chronographia*, ed., De Boor (Leipzig, 1882), 298.

- (13) 拙稿「マテヤテース機構の起源」『オリメント』第十六巻第一号（一九七三年）、一三九—一六〇頁。

- (14) Stratos, A. N., *op. cit.*, I, 344.

#### 四 帝位号変更の意義

ヘラクレイオス帝による帝位号の変更が、前述のとおりユステュニアヌス一世没後六世紀後半から七世紀初期にかけてローマ帝国における脱ラテン的潮流のなかでおこなわれたのであるが、このことは同時代のヨーロッパ史のなかでどのような意味あいをもっているのであろうか。いまこの意味を七世紀におけるヨーロッパ世界のなかでと、ギリシア民族の歴史のながれのなかでとの、二つの点から考えてみよう。

まず七世紀のヨーロッパをみると、かつてはローマ帝国領域に含まれていた地域、すなわちライン川とドナウ川とを結ぶ線の南西側およびブリタニアにおいては、ゲルマン系国家が並存していた。たとえばブリタニアにはアング

ロ・サクソン七王国、ガリアにはフランク王国、イスパニアにはヴィジゴート王国、イタリアにはランゴバルト王国があった。その他、ドナウ川中流地域のパンノニアにはアヴァール王国が存在していた。もちろんヘラクレイオス帝が帝位号を変更した六二九年の時点では、ローマ帝国はアルメニアからシリア、パレスティナ、エジプトを経てアフリカ、マウレタニアに至る地中海東南岸地域をまだ領有していた。しかもアルメニアからシリアにいたる地域は、ヘラクレイオス帝が六二九年にペルシア遠征終了にあたり、ペルシア帝国との間に交した条約で、ローマ帝国領に再編入した地域であった。<sup>(5)</sup>しかしこれらの地域は間もなく現われたアラブ人の侵入を受け、とくにシリア、パレスティナ、エジプトの三地域は、六三〇年代の中頃からヘラクレイオス帝の治世中にかれらの支配下に入ってしまった。<sup>(6)</sup>またアルメニアもアフリカもともに七世紀中頃から八世紀初頭にかけて、アラブ人の支配下に入ってしまった。<sup>(6)</sup>

いまアジア、アフリカ側における領土縮小は、いづれも六三〇年代以後のことであるのでしておくとして、ヨーロッパ側についてみると、ローマ帝国はバルカン、ラヴェンナ周辺地域、イタリア半島南端、それにシチリア、クレタを含むエーゲ海諸島を領有するに過ぎなかった。しかもその領有内の住民は、七世紀にスラヴ人<sup>(4)</sup>やアヴァール人の移住を許したとはいえ、その基本はギリシア人であった。つまりヘラクレイオス帝時代にコンスタンティノポリスに首府をおく国家は、ヨーロッパにおいてはイタリア、ガリア、イスパニア、ブリタニアに存在するゲルマン系諸国家、あるいはパンノニアのアヴァールと並び称せられる、いわば諸王国群のなかの一つの王国に過ぎなかった。しかもそれはギリシア人の国家であり、国名に冠した「ローマ」とはおよそ関係のない存在であった。

このようなヨーロッパの情勢のなかで、ヘラクレイオス帝が新たにもち出した「バシレウス」のもつ意味を考えると、それはその語が本来もっていた一族支配者としての「王」の機能に接近して来る。もちろん六二九年という年代ではヘラクレイオス帝は、シリア、パレスティナ、エジプト地方のセム・ハム系民族、アフリカのベルベル人、アジア東部のアルメニア人などを統治していたからその限りではこのバシレウスという語は複数民族支配者としての

「皇帝」としての意味をもっていた。しかしこれら諸民族への支配も六三〇年代より急速に弱くなっていき、七世紀中頃以後の「バシレウス」は、実質上ギリシア民族の支配者という意味に変わってしまう。

したがってヘラクレイオス帝時代に、コンスタンティノポリスに首府を置く国家は、もはやそれまでの地中海世界を支配圏に入れた「ローマ帝国」ではなく、「ギリシア民族の国家」へ変貌しつつあった。そのためヘラクレイオス帝が、帝位号を「バシレウス」と替えてしまったこと自体が、かえって同国をヨーロッパにおける諸国群の一国としての印象を強くしてしまったと考えられる。

これまでヘラクレイオス帝時代の考察にあたり、ギリシア民族の存在をやや強調してきたが、次にギリシア民族の歴史のなかで、ヘラクレイオス帝の帝位変更の意味を考えるとどういふことが言えるであろうか。ギリシア人の歴史を概観すれば、かれらは前二〇〇〇年頃に今のギリシア本土へ来入し、そのご前千年紀の前半にイタリア南部、シチリア、エーゲ海諸島、エーゲ海北部沿岸地帯へ植民した。さらに前千年紀の中頃から末期にかけて各地でポリスを形成し、ポリスごとに独立を維持した。それが前二世紀中頃より西方より進出してきたローマ人の支配下に入った。やがてローマ帝国が形成されるとギリシア人はローマ帝国の属州民となり、しかも三三〇年にはギリシア人の植民地の一つビュザンティオンに帝都が置かれた。これを機会に都名もコンスタンティノポリスと改められ、この地を中心にテサロニケなど各都市にはラテン系文化が移入された。したがって七世紀に至るまでのギリシア人の歴史は、前二世紀を境に、それまでのポリスを中心とした独立の時代と、それ以後のローマ帝国支配下の時代に分けられる。しかもローマ帝国支配下時代のうち四世紀以後にはすぐれてラテン的要素がギリシア人の居住地へ盛り込まれ、ユスティニアヌス一世時代までこの傾向が続いたのである。それがユスティニアヌス一世没後にラテン的要素はコンスタンティノポリスから薄らぎ始め、しかも六世紀末期になるとコンスタンティノポリスはローマと対立する形勢を示し、ヘラクレイオス帝の即位に至った。

クレイオス帝の即位後は、前項で言及したとおり、帝の軍隊生活の体験や行政機構再編成事業のなかでギリシア語使用の傾向が濃厚になった。つまり六一〇年代から二〇年代の情勢は、ギリシア民族にとっては、過去数世紀にわたりラテン系文化の下に埋もれていた自己固有のギリシア的要素が、ふたたびラテン系要素をはねのけて表面に出て来た時代であった。またこの二〇年間に、古代ギリシア神話に題材をもとめた意匠を刻した銀皿がコンスタンティノポリスで製作され、それにヘラクレイオス帝の極印が捺されたが<sup>6)</sup>、これもギリシア的要素の文化面での表面化を物語っている。

したがってこのギリシア的要素の表面化のなかで、ヘラクレイオス帝による帝位号のラテン的名辞からギリシア的名辞への変更は、ある面ではギリシア民族にとってギリシア的要素の復活を象徴的に表したものとも言えよう。

これを要するにヘラクレイオス帝による帝位号の変更は、七世紀のヨーロッパ世界においても、ギリシア民族の歴史的過程に照しても、ともにギリシア的意識を強調する役割を果していた。するとここでギリシア的要素を強調すればする程、ヘラクレイオス帝以後のコンスタンティノポリスに首府を置く国家に対し「ローマ帝国」という名称を使用するのが妥当でなくなってくる。しかし同時代の人びとは、みずからを「ローマ人、*Ῥωμαῖοι*」と自覚し、みずからの領土を「ローマニア、*Ῥωμανία*」と称し、その領域と住民の支配者を「ローマ人の皇帝、*Ῥωμαίων Βασιλεὺς*」と呼んでいた。<sup>6)</sup> そのためこの国家の名称から「ローマ帝国」の名辞を捨てさることも難しい。さらばヘラクレイオス帝時代以後の国家は、「ギリシア的なキリスト教ローマ帝国」と呼び得る。筆者はかつてこのようなローマ帝国を、「ビュザンティオン世界」と呼んだのであるが<sup>7)</sup>、いまビュザンティオン世界におけるギリシア的要素を重視するならば、ヘラクレイオス帝による帝位号変更は、ローマ帝国のビュザンティオン化にあたり、一つの節目になったと言えるよう。

- 註(1) 拙稿「ヘラクレイオス帝のバルシア遠征」『オリエンツ』第十二巻、第三・四合併号（一九七一年）九二頁。
- (2) 拙稿「テオファネス年代記の意義について——七世紀ローマ帝国研究史料として——」『西洋史学』69号（一九六六年）、五一頁。
- (3) 前掲論文五二頁。
- (4) 拙稿「七世紀スラヴのバルカン定住」『人文論究』第十四巻第四号（一九六四年）八三—八四頁。
- (5) キッツィンガー著、辻佐保子訳『ビザンティン美術の二潮流——ユスティニアヌス大帝からイコノクラスムまで』創文社、一九七一年、九—一〇頁。Bank, A., *Byzantine Art in the Collection of USSR (Leningrad, Moscow, 1968)* Plates 88-89.
- (6) 拙稿「ヘラクレイオス王朝におけるビザンティオン世界の成立」『史学雑誌』第七九篇第十二号（一九七〇年）、一六一—一七二頁、一九頁。
- (7) 前掲論文三六頁。